

およそ陸鳥は夜中盲となり、水鳥は夜中眼明也、ことに雁は夜中物を見る事はなはだ明也、他國はまらず我國^後の雁は、おほくは晝は眠り夜は飛行^{うひやう}く、眠る時は人に遠き處にて集り眠る、此時は首をあげて四方を見てゐる雁二羽あり、人これを番鳥といふ、求食^{あさる}にもまか也、飛に列をなすは雁行とて、兵書にもいへり、人のまる處也、されど居るにも位列をなして漫ならず、求食時は衆あさり、遊ぶ時はみなあそぶ、雁中に一雁ありて、所爲衆^{なすこころ衆}これに隨ふ、大將と士卒のごとし、人のきたるか又はあやしきを見れば、かのばん鳥羽た、きをなす、餘のとりこれをき、いかに求食ともねぶるとも、此羽た、きをき、あやまらず、幾羽も亂て飛あがり、さて列をなして去る、里言にこれを雁の總立といふ、雁の備ある事軍陣の如し、餘の鳥になき事也、他國の雁もまかならん、田舎人には珍しからねど、都會の人の話柄にいへり、

〔三養雜記〕^四がんくみつ口

童子の口ずさみに、鴈々みつくち、あとの鴈が先になつたら、こうがひとらしよ、といへることあり、筑紫がたにてももはらいふこと、ぞ、その詞のわけは、鴈々みつくちとは、鴈々見盡せといふことなり、遙に飛行を見つくすといふ意なり、さて鴈といふ鳥は、おのが子を先へたて、親鳥はそのあとより飛行ものなれば、親鳥先へ立ならば、子を奪取る、であらふといふこと、ろにて、こうがひは、子をうばひをいひ訛れるなるべく、とらしよは、とらりよの轉訛なりと、鍋田晶山いへり、筑紫がたにての唱も、事はおなじけれど、となへはいさ、か異なれば、そのなまりのま、を左にしるす、

がんく、しちやうがん、しちやう、あとのがんなさきになれ、さきのがんなあとになれ、ゆみのをれたやのをれた、はやういたてみづかけろ、

〔嬉遊笑覽^{十二}禽^{十二}〕棹になれ、釣になれとて、雁の連りて飛を興するは、卜養狂歌春の頃、鴈の雁をおほ